講義概要①

テーマ

母語話者ができるサポート

講師

ふくしま多文化共生サポーター　楊蕾さん（中国出身）

要約

１．自己紹介

留学生として来日し、2005 年から福島県に住んでいる。ふくしま多文化共生サポーターとして中国語を使い子どもの支援に関わってきた。

２．サポート開始時の聞き取りで注意することとその手法

（１）サポーター自身のことを話す。

子どもは初対面で緊張していて、「これからどうなるのだろう、どうされるのだろう」と不安と警戒心がある。それを和らげるためには、サポーター自身の自己開示、すなわちサポーター自身のことを話すことが効果的だ。例えば、自分が留学生として来たときトイレが見つからなくて困ったことなどの失敗談を冗談のように楽しく話すことなど。

（２）子どもの日本に対する思いを探る。

例えば、好きな食べ物を聞く。日本の食べ物が好きかの答えで、その子の今の日本に対する思いが分かる。マイナスの言葉ばかりが出る時は、まだ日本文化を受け入れる準備ができていないことがわかる。母国に帰りたがっているのかもしれない。逆にプラスの言葉が出るときは、いま日本文化に馴染もうとしているということがわかる。答える表現が違うので見逃さない。

（３）少しずつ話を聞く。

無理せず少しずつ話をして、日本に対する思いや何を助けて欲しいのかなどの気持ちを聞き取っていく。子どもが嫌がる表情をしたら、質問はすぐに取り下げ、話題を変える。好きな色について話をすることもある。そして、次回はさりげなくその色を服や持参する小物(バッグや文房具)に取り入れたりして、距離を縮めていく。

（４）尋問はしない。

子どもの様子を観察し、そこから話題を見つける。「今日は眠そうだけどどうしたの？夕べは眠れなかった？」などと聞く。決して「何かあったの？」と尋問はしない。

子どもが助けて欲しいと思っていることを聞き取ったら、自分だけで対処するのではなく、必ず学校の先生に報告・相談し、対処の方法を学校の先生と考える。

３．学校との関係づくり

（１）将来を見据えたサポート

福島県国際交流協会の早期適応のためのサポート派遣事業では、活動は 25 回で数か月間しかできない。今後、長期にわたってサポートに関わるのは学校の先生。将来的に学校の支援のもとで子どもが自立できるようにするための支援を行うのが、サポーターの役割だと思う。

（２）学校行事へのサポート

最初の打ち合わせで、学校から年間スケジュールと時間割をもらい、特に学校行事は文化の違いから緊張を強いるので、その日程に合わせてサポートに入るようにしている。

例えば、運動会の前日にサポートに入る。人前で失敗して恥ずかしい思いをするのではないかと心配しているかもしれない。本番で使う言葉が分からないかもしれない。だから、当日困ったときに誰に聞けばいいのか、その人はどこにいるのかなどを教えると子どもは安心する。

家庭訪問の前後にもサポートに入る。家庭訪問の前だったら、家庭訪問の意義を説明したり、時間の確認をしたりする。家庭訪問の後だったら、先生の説明が正しく伝わっていたかを確認する。

（３）自分の携帯番号は教えない。自分の限界をわきまえる。

自分の携帯番号は、保護者や子どもには教えないし、直接連絡をし合うことはしない。必ず県協会や学校を通じて連絡を取る。例えば、夜中に子どもから「お父さんとお母さんが、今、喧嘩している」という電話を受けても自分は何もできない。自分は無力である。

（４）子どもと先生を繋ぐ。

子どもが学校の先生との関係をうまく作っていくことが大事。その先生にとって初めての外国人生徒で、言葉や文化の壁で子どもとの関係作りが上手くいかないのかもしれない。その壁を乗り越えるための手伝いをすることもサポーターの役割。

例えば、「朝、子どもが挨拶しない」と先生が言ってくる。先生には、中国の学校では、挨拶をする習慣がないがないことを伝える。子どもには、日本ではあいさつすることでよりよい人間関係が作れることを教える。

報告書を書くことも大切。どのようなことを子どもに伝えたか、子どもから何を聞き取ったかなどを学校側に伝える。子どもが学校に知られたくないと思っていることは報告しないが、問題が大きくて関係機関の協力が必要と思われる場合は、子どもの了解を得てから伝達する。

サポーターは自分だけで判断しない、支援をしない。自分がしたいことをするのではなく、子どもの自立のために子どもの実態を関係者に報告し、今の環境でこの子にとって一番いい方法をみんなで探すことが大切。学校側に方法の提案はするが、強く言わないことがポイント。子どもへの支援は、サポーターだけでは決してできない。学校との関係づくりがうまくいっていて、はじめて効果的な支援ができる。

４．子どもの悩みの聞き取り方

（１）いきなり本題に入らない。

子どもは違う環境から来たので、不安や不満などをたくさん抱えている。それらを自分から吐き出してもらうことが大事である。「昨日はどうだった？」「朝ご飯はみんなと食べた？」と周辺から探りながら聞く。いきなり本題に入らない。信頼関係ができてから聞くようにする。

（２）否定はしない。

例えば「日本人はすべて悪い」というような極端な発言や明らかに間違っていることを言う場合があるが、その場合も決して否定しない。そこで否定すると、子どもはまた心に蓋をしてしまう。繰り返しの術(子どもの言った言葉をそのまま繰り返すこと)で、「そうなのだ。日本人はすべて悪いって思っているんだね。」と子どもに返し、本人に考えさせ気づいてもらう。思ったことをいつでも話していいのだという環境を作ってあげる。自分の中のものを吐き出さないと事実を受け入れるスペースができない。否定せずにすべてを聞く。ネガティブな言葉から本人の今の精神状態が分かる。

（３）自分の意見は言わない。

子どもがサポーターに早急に意見を求めてくる場合もある。それでも自分の意見は言わない。「あなたが先生だったら、どう思う？」などと返す。それでも「先生はどう思っているか聞きたい。」と聞かれることがあるので、その場合はできるだけ子どもが傷つかないように神経を使って意見を言う。大きい問題があった時には、学校と話し合いで解決の道を探す。

５．初期指導のポイント

話だけして楽しいだけで終わりと勘違いされないようにする。最初の１回目からこのサポートの時間は勉強する時間であることを認識させる。

まずは挨拶の仕方。次にその子どもの関心や必要性が高い話題で勉強する。例えば、バスケットボールが好きな子ならバスケットボールの話題、通院の予定がある子どもの場合には通院に必要な情報、その場合、教材となる雑誌など学校では持ち込み禁止の物を持ち込んでいいか、事前に先生に相談する。

教科学習に関わる指導については、担任からのリクエスト（理科が弱いなど）を踏まえ、子どもと相談して決める。

６．考え方や文化習慣の違い、日本の学校生活の説明

（１）その子の持つ文化習慣を否定しない。

その子が持っている文化や習慣を否定しない。日本にいるのだから、日本の習慣に合わせなければだめとプレッシャーを与えない。プレッシャーを与えると、受け入れる余裕がなくなる。

（２）子どもに選択させる。

日本の習慣に従った場合と自国の習慣を貫いた場合の結果を伝え、日本の習慣に従うメリット、自国の習慣を貫いた時のメリットとデメリットを自分で考え、気づき、判断するように促す。日本の習慣と自国の習慣、それを必要に応じて子どもが選べるようにすることが大切である。

例えば、トイレで靴を履きかえることが面倒くさいからやりたくないという子どもがいる。子どもは、「いちいちトイレで靴を履きかえるなんて、面倒くさい。いやだ！」と言ってくる。そんな時は、「そうだね。面倒くさいね。でも、これは日本の習慣なんだ。もし、履き替えない子を見たら、他のみんなはどう思うかな？」と言う。子どもは「変だ、汚いって思うかも」と答え、「そうだね。だったら、あなたはどうする？」と返す。一旦、子どもの気持ちを受け止めて、本人が考え解決できるように促す。

（３）理由や背景を説明する。

通学班で学校に行く際、近道があるのに遠回りすることに不満な子どもがいた。学校に近道の状況を尋ねたら、森の中の道で不審者が出る可能性があることがわかり、子どもにその理由を説明し子どもが納得した事例がある。

このように、周りに合わせないことが不利益につながることもあるので、サポーターが日本の習慣や学校の決まりの背景や理由を説明し、最後に子ども本人に判断させることが大事である。

７．母語で日本語文法の解説

文法や使い方は、母国語で説明すると理解しやすいし習得が早い。「ありがとう」という単語の意味はわかっていても、日本と母国では使うタイミングと場面が違うことがある。また、言葉の背景にある日本文化を説明してあげると、さらに理解が深まる。

８．まとめ

サポーターが支援の主役ではない。自分がその子どもに一生関わることはできないのだから、自分の限界を知り、自分が活動から引いたときを見据えた支援をしていくことが大切である。

子どもに自分で考えて解決する力や助けてもらう方法を身につけさせたりすることが大切。かわいそうという気持ちだけでは、いい支援はできない。かわいそうという同情では何も変わらないという意識を持つべきである。保護者も子どもも、サポーターに甘えてくることがあるので、そこで同情して安易にサポーターが解決してしまわないようにする。サポートは一人ではできない。学校と県協会の力を借りて、その子にとってベストの方法をみんなで探すことが大事である。